4～6 歳児のストーリーナラティブの分析

ナラティブ発達評価指標作成に向けての基礎的研究

○瀬戸 淳子¹・秦野 悦子²

(¹帝京平成大学・²白百合女子大学)

キーワード：ストーリーナラティブ、発達評価指標、幼児期

Narrative analysis of story retelling in preschool children

Junko SETO¹ and Etsuko HATANO²

(¹Teikyo Heisei University, ²Shirayuri College)

Key Words: Story retelling, Narrative analysis, Preschool children

目 的

幼児期後期から学齢期にかけて、経験や物語を順序立てて伝えるナラティブの能力が発達するが、このようなナラティブの発達のプロセスや評価の方法論については、まだ十分に研究が進んでいないのが現状である。本研究では、幼児が物語をどのように語るのか、紙芝居の読み聞かせ後に話の内容を語ってもらうという場面で、幼児後期のストーリーナラティブの発達の様相を明らかにすることを目的とする。瀬戸・秦野(発達心学会 2014)では、読み聞かせ後に語られた叙述文の出現数が5歳後半から6歳前半にかけて急増することを明らかにしたが、本研究では語られる内容や構造の分析を行い、幼児期後期の語りの発達の特徴をさらに詳細に明らかにすることを目的とする。

方 法

調査協力児：保護者の調査協力の承諾が得られた幼稚園年中児年長児 83 名(4歳前半 4 名、4歳後半 17 名、5歳前半 23 名、5歳後半 14 名、6歳前半 15 名、6歳後半 10 名)。**調査期間：**2013 年 2 月 3 月 7 月。**材料：**出版社と著者の許可を得て、絵本「クレヨンのはしご」(板橋敦子著 ひさかたチャイルド発行)の中から 14 場面の絵を選択し、物語の筋を変えずに各場面に合わせて表現をやや修正した文による字のない紙芝居を作成した。読み手の刺激提示の質を一定にするために、話が上手な幼稚園教諭に依頼し文を読んでもらい録音した 4 分の調査用紙芝居 CD を作成した。**手続き：**「あとでお話してもらうから、どんなお話か良く聞いてね」と紙芝居の CD を聞かせ、物語の展開に合わせて調査者が絵をめくっていった。紙芝居の終了後に絵をしまい、視覚的手がかりが無い状態で紙芝居の内容を話してもらった。すべての発話は IC レコーダーに録音した。**分析資料：**すべての発話のトランスクリプトを作成し分析の対象とした。**分析の視点：**語られた表現内容の構造分析を行なうために物語の筋立てに必要な基本の 21 述語文(動詞述語文 20、形容詞述語文 1)を抽出した。

結 果 と 考 察

(1) 語られる登場人物数

紙芝居に出てくる登場人物 6 名のうち語られた登場人物の年齢群毎の平均出現数を図 1 に示した。5歳後半までは徐々に上昇し、その後 5歳後半から 6歳前半にかけて顕著な伸びがみられた。また、語られる登場人物数が多いほど、語られる物語の筋立てに必要な基本の叙述文数は多くなる傾向がみられた。しかし、登場人物を余り語らず、述語文をつないで語る子どももいた。主人公についての言及は、6歳代になっても 50%を超える程度にとどまった。

図 1 語られた登場人物の平均数

(2) 物語のどの部分が語られるか

物語の筋立てに必要な基本 21 叙述文を、発端・展開・結末 7 文ずつの 3 つの場面に分け、場面毎に語られた述語文の年齢別平均数を図 2 に示した。語られる内容は、結末部分、発端部分、展開部分の順に多く語られた。また、5歳後半から 6歳前半にかけて 3 場面とも語りの量が急増した。

次に、一人の子どもが 3 場面の内どの場面の語りをしたかを示したのが図 3 である。5歳前半までは 1 場面、2 場面、3 場面語っている子どもがほぼ 3 等分されていたが、6歳代で 3 場面すべての内容を含んだ語りをを行う子どもが 90% 近くとなった。21 叙述文を個別にみると、「落ちた」「お母さんが木から下ろした」という結末部分、「雷の女の子に出会った」という物語の展開部分、「(クレヨンのはしごを登った)」という場面移動部分、「絵を描いている」という物語発端部分の物語の核となる叙述文の出現率が高かった。

(3) 文と文の接続 紙芝居の結末部分には文と文の接続詞に 2 回逆接が使用されているが、この部分で 1 回でも逆接の接続表現をしたのは 29.4% で、そのほとんどが登場人物は 4 人以上で 11 叙述文以上の表出があった子どもだった(例 1)。

5歳後半から 6歳にかけて、物語の全体構造の意識化が高まることが示唆された。今後、個々の語り様式、内容について詳細に分析をしていきたい。

例 1：5歳後半女児の語り（物語の筋立てに必要な 11/21 の述語文を含む）
「たっちゃんクレヨンを持って、はしご、絵を描いたら、はみ出して、どんなところでも絵を描いて、はしごを作って、小鳥が来て、はしごを作って、木の上、木よりも高くはしごを描いたら、雷の国に着いて、みんなのところに遊園地をつくってあげて、そしたら、もうパイパイって言って降りようと思ったら、クレヨンがなくなって、でも、指についたクレヨンをまた、ついたクレヨンで描けるかなと思って描いたら、木の上に落っこって、お母さんが下りさせてくれた。」

図 2 語られた述語文の場面別平均数

図 3 語られた場面数

本研究は平成 23~26 年度科学研究費補助金基盤研究 C (課題番号 23531307) 助成を受けた。